

ヒペリカムは何故咲くの？ (開花に及ぼす日長と温度)

表1 日長の違いがヒペリカムの発蕾・開花に及ぼす影響^{a)}

試験区 (明 期)	発蕾日及び開花日 (●●●●●●：発蕾日 ●●●●●●：開花日 ▲：収穫日)						開花状況		
	9月			10月			発蕾率	開花率	採花率
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	(%)	(%)	(%)
光中断 (23:00～2:00)							100	100	100
13時間 (5:30～18:30)							100	100	—
12時間 (6:00～18:00)							83	83	—
自然日長							67	50	—

^{a)} 供試品種：「ピンキーフレア」。さし木：2005年6月19日、定植：7月21日。定植後から10月6日までは冷房の2区内(昼温25℃、夜温12℃)で、その後は無加温ハウスで栽培した。7月25日より日長処理を開始。光源として60W省エネ白熱電球を使用。

^{b)} 光中断区以外は10月25日に調査を打ち切り。

表2 ヒペリカムの栽培温度が発蕾、開花に及ぼす影響^{a)}

試験区	処理期間中の平均気温		開花状況		
	昼 8:00～17:00 (℃)	夜 17:00～8:00 (℃)	発蕾日 (日)	開花日 (日)	収穫日 ^{b)} (日)
1	24.3	16.9	8/22	9/ 7	—
2		26.2	8/17	8/31	9/12
3	34.0	16.9	未発蕾	未開花	—
4		26.2	未発蕾	未開花	—

^{a)} 供試品種：「ピンキーフレア」。さし木2005年5月12日、定植6月22日(1本/株仕立て 各区4株)。試験期間7月6日～9月13日。

^{b)} 2区以外は9月13日に調査を打ち切り。



出荷前のヒペリカムの様子(1月)

国内産ヒペリカムは、夏期の出荷が主体で、それ以外の時期には輸入品が流通しています。そこで需要期である冬春期に出荷できる栽培技術を開発するため、開花に及ぼす日長と温度条件を調査しました。

日長の影響を検討するため、7月上旬から光中断(明期 23:00～2:00)、13時間日長(明期 5:30～18:30)、12時間日長(明期 6:00～18:00)および自然日長の処理区を設け、開花率を調査しました。その結果、光中断、13時間日長の開花率は100%となりましたが、12時間日長および自然日長の処理区では、一部の花芽が分化しておらず、開花率は低

下しました。

また、夏場にガラスハウスと冷房ハウスを組み合わせ、昼夜の温度条件が開花に及ぼす影響を調査しました。その結果、終日または昼間に冷涼な条件で栽培した場合は開花し、逆に昼間が高温の場合には、花芽は未分化で発蕾しませんでした(表2)。

以上より、ヒペリカムは限界日長が12時間程度の質的長日植物であり、高温に遭遇すると花芽分化が抑制されるものと推測されました。

(花き担当 平石真紀 088-863-4918)